

【記録】

アタカマは想像していたのよりずっと小さくてじんまりした町。静かで平和。唇ものどもかひかひのかさかさ。憧れの地にいるというのに、まさかのホームシック。人とニヒル。湿気が恋しい。

日の出前の欠間泉は死ぬほど寒かった。手の甲が血の氣を失って、見たこともない色に。高いところは寒いところはもうニヒリ。

ほろりにまみれた町並み、どこまでも続く薄茶色の大地、匂いのない澄み切った空気、今日の夕焼け、みんないい。

国境越えは絶景の連続。でも、極寒、強風、高山病、未舗装のガタガタロード、おかまいたしに流れるボリビアンミュージックに打ちひしがれた。

誰かと共有できたら、

いたわりあえたら、

絶景の感動が孤独感

スクレ着。知っている「街の雰囲気」にほっとする。

わたしはこうして旅できること、「恵ま

れている」の一言で片付けた。よい。小屋のような簡素な宿で働く子供たち、道行く人々の顔に深く刻まれたしわ、バスから見えた貧しそうなお村、やせた犬とやせた牛とやせた口い...

それぞれの場所でそれぞれの事情があって、みんな生きている。人々の営みの尊さはどこかの国だって変わらぬよい。



【記憶】

首都のサンティアゴから長距離バスに乗ること24時間。時折、窓のカーテンを開けて、太陽が沈んだり昇ったりするのを眺めた。日が沈めば山の影や星が美しく、日中は日本では考えられないような果てしない大地が広がっているのがわかる。長い道のりに退屈することはなかった。

そうして着いたSan Pedro de Atacamaは観光の拠点となる小さな村で、人であふれていたけれど、のんびりした空気が流れていて静かだった。世界一乾燥している場所といわれるだけあって、息を吸うだけで空気が乾ききっているのがわかった。自分の肌が、空気中の水分の少なさをあんなにも感じたことはない。

滞在する間、近くの遺跡をひとり訪れた。からりとした気持ちのよい天気の中、未舗装の道を自転車で風を切って進むと、自分が自由であることがとてもすがすがしかった。ある日はただ広場で人々を眺めて宿でのんびりと過ごし、ある日は天体観測に出かけた。どれも贅沢な時間だった。

そして、アタカマからチリ国境を越えてボリビアへ。美しい山々、見たことのない色の湖、不思議な形の岩や植物、野生のビクーニャやフラミンゴ。高山病や車酔いでぐったりだったけれど、ハードな環境だからこそその絶景に心を奪われた。

パンやコーヒーの質素な食事が、いつもよりおいしい。出会った旅人たちと言葉を交わすと、自分の世界が広がっていくような気がした。始まったばかりの南米旅は、すべてが新鮮だった。

当時の日記を読み返していると、景色の美しさに感動する以上に、心細さを感じたり、目の前の現実や自分のこれからの頭を悩ませたりしていたことに驚いた。文字を見つめていると、くよくよしていたあの時の自分がよみがえってくる。

つらかった思い出がなだらかに風化し、記憶は美化される。

あの風景は、遠いところ、めずらしいものだから価値があるわけじゃなくて、その景色を目の前にしていたかけがえのない時間に価値があるのだと思うようになった。見て感じて、あれこれ考えたことに。旅でなくても、私が今いるこの当たり前の日常にも価値がある。そんなことを考えている。